

SSSV報告

歯学科3年 氏田倫章

私は今年の3月に日本学生支援機構（JASSO）による海外留学支援制度（SSSV）プログラムで、インドネシアのジョグジャカルタにあるガジャマダ大学に2週間留学させて頂きました。この場をお借りして留学の報告をさせていただきます。

今回のSSSVの滞在1週間目、2週間目の内容は全く違うものでした。1週間目はガジャマダ大学が企画した3大学合同プログラムに沿って行われました。今回は徳島大学（男性4人）、九州大学（女性3人）の歯学部生（5年生）と現地で合流して共にガジャマダ大学の歯学部、ジョグジャカルタの文化を学んでいくというものでした。他大学の学生が先に帰国した2週間目は、新潟大学の2人でジョグジャカルタの地域歯科医療を中心に学びました。

1週間目のプログラムの内容は大学での歯科診療（矯正、歯周、口腔外科、義歯、保存）の見学、歯学部生の授業への参加、学術プレゼンテーション、また自分たちの大学紹介のプレゼンテーション等が含まれていました。他にインドネシアの文化体験も含まれ、世界遺産観光（ボロブドゥール、

プランバナ）、ジャワ文化伝統のバティック製作、ラーマヤナ舞踏鑑賞、冠婚葬祭での民族衣装を着る体験などを行いました。また歓迎パーティーも催され、我々はインドネシアの伝統的なダンス、歌などで手厚いおもてなしをうけ、そのお返しに前日深夜まで稽古した日本の伝統的な踊り（阿波踊り、マルマルモリモリ、空手の型）を披露し会場を沸かせました。他大学の学生とは、初日の顔合わせではお互い緊張していたものの、ジョグジャカルタの素晴らしい自然と文化に囲まれた豊かな環境の中での体験や感動を通すことで、自然と打ち解け、素晴らしい仲間と共に本当に充実した日々を過ごすことができました。しかし親密になった分、最後の別れは悲しいもので、涙で前が見えませんでした。

2週間目は地域医療を中心にした活動が多く、ヘルスセンターへの訪問、小学校訪問、プライベートクリニック（矯正、歯周）訪問、ガジャマダ大学において地元小学生へのブラッシング指導、検診、フッ素塗布、勉強会の見学等を行いました。また生活スタイルも変わりホテル暮らしからホームステイへと変わりました。私がお世話に



小学校訪問にて



伝統楽器の演奏

なったDr. Nunukの家庭は、高校生の男の子 (Zufa)、中学生の男の子 (Ariq)、幼稚園児の女の子 (Fica) の3人の子供がいて、家の中はいつも賑やかで、仲間を失った悲しみを子供達が嘘のように忘れさせてくれました。大学内においても我々のことをガジヤマダ大学の学生がしっかりと対応してくれ何不自由なく2週間生活することができました。

今回のSSSVを通して他大学の学生との交流が貴重な経験となりました。ガジヤマダ大学の学生を通して勉強に対する姿勢の違いを認識できました。歯学に関する授業では英語を用いて行われているため英語は堪能であり、また授業に対して

も積極的で日本の学生よりも勉強意欲に満ち溢れていました。事前に講義に対して予習し臨んでいる生徒が多く、講義は生徒が質問して先生が答える双方向的な形式であり、日本との講義のスタイルの違いに驚きを通り越し危機感さえ感じました。徳島大学、九州大学の学生とはプログラムを通して共に行動し、課題に取り組んだり、勉強、大学生生活、将来について様々なことを語り合いま



診療を見学したあとの集合写真



ボロブドゥールにて集合写真



歓迎パーティでの写真



ホームステイ先での写真

した。3大学合同の機会がない限り、地域も違うため学生のうちに交流することはめったにありません。お互いに刺激し合える仲間をつくることができ、本当に幸せに思います。仲間に負けぬように自分の理想としている歯科医師像を見据え、今後の学生生活を目標に向かって着実に努力してい

きたいと思います。

最後になりましたが素晴らしい経験をさせていただき心から感謝しています。また私にこのような機会を紹介して下さった石田陽子先生、ありがとうございます。





SSSV報告 —インドネシア大学を訪問して—

歯学科6年 笠原由伎

私は2014年3月、インドネシアの首都ジャカルタにあるインドネシア大学にて、日本学生支援機構（JASSO）による海外留学支援制度（ショートステイ・ショートビジット）の2週間にわたるショートビジットプログラムに参加させていただいた。滞在期間中は大学の歯周病学教授のお宅でホームステイをし、有意義な環境で過ごすことができた。

人口1000万人を有するジャカルタは、想像をはるかに超える大都会だ。メインストリートには高層ビルが立ち並び日本企業のビルも多く見られる。いたるところで新しいビルやマンションが建築されておりこの都市の急成長ぶりは目を見張るものがあった。しかし、そのビル群とその背に広がる瓦屋根の家々とはあまりにも対照的だった。また道路には車・バイクが溢れ、排気ガスが立ち込める渋滞が永遠と続いていた。渋滞を横切り道路を渡る人や、車の間をぬって歩き、新聞や

フルーツを売り歩く人もいた。いろいろな点で落差に驚かされたが、世界有数の経済と政治の中心地であることは間違いなかった。インドネシア大学はこのような熱気と勢いに溢れる街に位置していた。

インドネシア大学は新潟大学のように2つのキャンパスを有しており、五十嵐キャンパスの様な多くの学部が在る“デポキャンパス”と、旭町キャンパスの様に医療系の学部からなる“サリンバキャンパス”に別れている。サリンバキャンパスは歴史ある築100年を超えた伝統的な建物で、一方デポキャンパスは改築したため新しく近代化的なキャンパスである。歯学部生は、1～3年まで近代化的なデポキャンパスにてファントムを使った実習やPBLを通して基礎を学び、4年生でサリンバキャンパスに移り半年間研究室にて論文を完成させ、4年後期から1年間患者さんを受けもち臨床実習を行う。



私は現地の学生のそのようなカリキュラム1つ1つを見学し、説明を受け、時に授業に参加させてもらった。学生と話す中で常々感じていたのが彼らの英語力の高さだ。それを如実に表していると感じたのは参加したPBLの授業である。学生達がパワーポイントを英語で発表し、積極的に討論している姿は実に印象的であった。難しい専門用語をわかりやすく噛み砕いて説明をし、工夫して英語で発表を行う。互いに知識を深め合い切磋琢磨する姿は素晴らしかった。挙手が次々と起こり英語が飛び交う授業の中に、彼らの勉学への意欲、熱意も目の当たりにし、日本学生である私たちに足りないものについて深く考えさせられた。

また、見学している中で最も衝撃を受けたのはインドネシア大学生の臨床実習のミニマムリクワイメントの多さだった。1年間の臨床実習を通して最低限行う課題があり、それらを決められた症

例数こなさないと卒業することができない。彼らは私たちのリクワイメントの何倍もの量をこなす必要があるため、自ら患者様探しをするそうで、時にはお金を払って自分の患者様になってもらおうと聞いた。現地の学生ならではの悩みを知り驚いたが、学生の中に私たちよりも豊富な経験を積むことができる点を羨ましく感じた。

しかしながら、清潔・不潔域についての概念はまだ乏しいようで、抜歯や小手術をする際に滅菌手袋を使用していない場面を見た。衛生面の意識が低いのではと感じる時があった。

最後に、インドネシア大学を訪れることにより、自分の英語力の低さを痛感し、また限られた時間・経験の中で日々の診療をより濃くて深いものにすべきであると思えた、いろいろな刺激ある2週間となった。この経験を活かして残り短い学生生活を充実したものにするよう励みたい。



SSSV報告

歯学科6年 五月女 哲也

3月2日から16日までの2週間、タイ南部の都市ハジャイにあるプリンス・オブ・ソクラー大学（以下PSU）へ日本学生支援機構（JASSO）による海外留学支援制度により、同期の加瀬とともに短期留学させていただいた。日本とタイにおける歯科医療の違い等真面目な内容については笠原さんがしっかり書いてくれていると思うので、ぼくはタイでの生活について記してみたい。

留学前に僕が持っていたタイのイメージは、暑くて雑然としていて物が安くて食べ物が辛くて果物がおいしくてゾウがいて海がきれいな微笑みの国といったもので、そもそも汗っかきで潔癖症気味で辛いものが苦手なぼくにとって短期とはいえ留学することはとても勇気がいるものだった。加瀬の強い勧めもあり決断したのは出発まで1カ月を切った頃で、現実味のあまりないままに羽田空港からバンコクのスワンナプーム国際空港へと降り立ち恐ろしいほどの熱気を感じた時、やっとぼくはタイに来たのだな、と実感したものである。

バンコクで飛行機を乗り継ぎ1時間ほど、日本から約7時間で到着したハジャイは南部最大の都市とされ、中心地は栄えており高層ビルが立ち並び一方、ひとたび路地に入れば野良牛が草を食むという非常に雰囲気の良い街であった。やはりとても暑く、外に出た瞬間に汗をかいた。湿気がない分予想していたより過ごしやすく、雲ひとつない青空で晴れ晴れした。余談だが、タイ滞在14日間中でゾウを2回見た。1頭は車のような表情で道路を歩いており、1頭はレストランに餌をねだりに来た。やはりタイといえばゾウだ、と心躍った。

ぼくたちは寮のようなところに宿泊させていただいたが、シャワーは温度調節出来ず水しか出なかった。トイレの紙は下水道の関係か流れにくいので備え付けておらず、隣にあるシャワーで洗う

のがタイ流らしかった。果たしてここで2週間過ごすことができるのか、と愕然としたが次の日には慣れたのでなんの問題もなかった。羽虫は外にはたくさんいたが室内には入ってこず、こぼしたジュースを狙い集まってきた大量の真っ赤なアリは殺虫剤で一撃だった。生きる力というのは苦境に立たされてこそ磨かれる、と感慨深い思い出である。

PSUの同級生たちはぼくらをゲームセンター、ボウリング、ラフティングなどに連れ出してくれた。太鼓の達人では新記録を更新し、ボウリングはぼくらが1位・2位を獲得しカッコいいところを見せられたが、ラフティングでは流れのないところですら転覆し、岩場に乗り上げ、爪が割れ痕を作りダントツで遅く苦笑いされた。海へも行った。クリアで信じられないほどきれいだったが、もっときれいな海はたくさんあるらしい。素晴らしい国である。

そして食事である。普段は甘口しか食べられないぼくにとって食べ物はこの旅で最大の心配事であり、辛いものばかりで何も食べられず、ガリガリに痩せてしまうことを心配しすぎるあまり古町のタイ料理屋さんへ修行に繰り出したほどである。実際のところ食べ物は期待に違わず全て辛



く、「これなら全然辛くないよ、甘いくらいだよ」と勧められたものすら辛かった。だがなぜだか不思議とおいしく食べることができた。日本人の口に合うようでほぼ全ておいしく、ネギをなにかの皮で包んだまんじゅうのようなやつだけが唯一口に合わなかった程度である。しかも屋台の食べ物はとても安く、1食300円程度でお腹いっぱい食べることができた。極めつけはマンゴーで、日本ではあじわったことのないほどの甘さに感動した。これを食べるためだけにタイに行ってもいいくらいだ。ドリアンも食べたがいい経験になった。もう食べなくて大丈夫である。

タイの人々はみなやさしく親切であった。同級生は大きなテストが近いにもかかわらず時間を割

いてくれた。タイ語がわからないぼくたちのためタイ語英語辞典を作ってくれ、ぼくたちが困らないように気を配ってくれた。街の人も目が合うと必ず笑顔で挨拶をしてくれた。コインランドリーの使い方がわからず汗だくになっていたぼくたちを助けてくれた警備員のおじさんにはこの場を借りてお礼を言いたい。

このようにタイは暑くて物が安くて食べ物が辛くて果物がおいしくてゾウがいて海がきれいな微笑みの国であった。最高の2週間であった。

海外に興味はあるけど…と少しでも思う人はためらわず是非1度挑戦してみてほしい。きっと素晴らしい時間を過ごせるはずだ。

